英語史における非人称動詞の実証的研究

データを緻密に分析し、英語史を解き明かす

三浦 あゆみ
MIURA Ayumi
大阪大学大学院言語文化研究科 准教授

図1 中英語の代表的作品『カンタベリー物語』の写本（*Ellesmere Chaucer, c.1400–1410, Huntington Digital Library*）

図2 OED Online（https://www.oed.com/）より、“English”の項の見出しと過去千年以上に渡る用例のリスト（一部）

文化間で互いに理解しあい、国際的なパートナーシップを築くためには、異文化とその言語についての深い理解が必要不可欠です。現在、世界中で幅広く用いられ、多様に展開している英語は、初めから現在のような形であったわけではありません。中英語（1100年から1500年頃の英語。図1）には非人称構文をつくる動詞、すなわち「非人称動詞」が数多く見られますが、これは現在の英語からはほぼ姿を消しています。私の研究では、大規模な言語資料として複数の歴史的辞書のデータを分析し（図2）、感情を表現する非人称動詞と類義語の比較を通じて、非人称構文を制約する複雑な諸要因を特定しました。近年、人文学では、歴史資料をデジタル化し、情報学的手法によって人文学的な問題に取り組むデジタル・ヒューマニティーズという分野が発展していますが、私はそれに言語学の知見を取り入れつつ言語の変遷を研究しています。

キーワード
英語史、言語学、辞書学、デジタル・ヒューマニティーズ

応用分野
英語教育、歴史学、エモーション・スタディーズ

［研究の先に見据えるビジョン］感情を表す言葉の変遷から人間を考える

感情を表現する言葉は、感情についての私たちの考え方や、その感情が他の概念とどのように関わるのかを表しています。それは歴史のなかで変化してきたし、これからも変化していくことでしょう。そして私たちはそうした言葉を通じて、その重要な側面である感情の観点から「人間」の理解にアプローチできます。現在、心理学や歴史学をまたいだ学際的な研究分野として「感情史」や「エモーション・スタディーズ」が注目されています。感情をめぐる言語の歴史は、こうした展開に対して基礎研究として寄与することが考えられます。言語やその歴史の研究は本来学際的なものです。欧米では近年、言語変化のモデルと数学・物理学との関係を探る研究や、主に理数系の計量的手法を活用した古典作品の文体研究が行われています。今後も可能な限り、狭義の言語学や文献学に留まらず、他分野の知見を活かした研究に従事したいと考えています。